洞窟探検家

根津賀　内

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
洞窟探検家

【Ｎコード】
Ｎ５４３５Ｘ

【作者名】
根津賀　内

【あらすじ】
ひょんな事から偶然手にいれた謎の地図。
その地図が示す古の社には、広大な洞窟へと導く階段が隠されていた。
少年が迷いこんだ洞窟の恐るべき秘密とは？

冒険のきっかけ

夕方の陽が落ちようとする時間、店じまいを始めた古本屋で少年が迷惑がられながらも帰らずにねばっている。

なんとはなしに手に取った古典文学の本に古い紙切れが挟まっている。

よく見ると地図の様だが、ずいぶん昔に書かれたものらしい。

少年は江戸時代より前だろうと、勝手に想像しながら、その地図を眺めていた。

「あれ、この地形、うちの家の近くの裏山に似てる」

店主に帰る様促され、仕方なく地図ごと古典の本を買い店を出た。

お社

学校が休みの土曜日、少年は例の地図を片手に山に入っていった。
鬱蒼と生い茂る草を掻き分け、地図にある印を探す。
「なんだろ、あれ・・・」
かなり年代物の小さな古いお社が眼前に現れた。
錆び付いた鉄の扉には不気味な呪文の様な文字が描かれ、お札が沢山張り付けられている。
「開けてみようかな・・・」
鉄の扉の蝶番に触れると何とも言えない悪寒に襲われたが、勇気を出して思いきり開いた。
「わっ！！！」
お社の中は真っ暗闇で、かすかに見えるのは地下へと続く石で出来た階段のみであった。
「何も見えないし今日は帰ろう・・・」
少年は気味の悪い雰囲気を感じながら、山を降りた。

洞窟探検

「翔！どこへいくの？」
外出しようとした少年を母親が呼び止めた。
「あぁ、ちょっと探検に行ってくる」
少年が少し面倒な感じで答えると
「何そのライトの付いたヘルメット、リュックにもいっぱい詰め込んで・・・・・」
「裏山に行くだけだよ、夕方には帰るし」
母親は怪訝な顔をしながら、
「気をつけるのよ、あんまり危ないとこいっちゃだめよ」
と言いながら，翔を見送るのであった。

ようやく、昨日のお社まで来ると
「今日はしっかり準備してきたぜ」
と独り言を言いながら、例の鉄の扉を開け、ヘルメットのライトをオンにした。

お社の中には蜘蛛の巣で張り巡らされた仏像や幽霊の様な不気味な絵が飾られていた。
翔は計画通り，石の階段を降り始めた。

その瞬間、
バタァン！！！！！！！！！！
大きな音と共に、地上に通じる階段が錆びた鉄の板で閉じられてしまった。

脱出不可能

「そんな、嘘だろ?!」
半泣きになりながら、閉じてしまった入り口の鉄板をガンガン叩く。押しても引いてもびくともしない。
「なんてこった・・・」
絶望感が全身を支配する。自分はもうここで死んでしまうんだと悲観的な考えだけが浮かんでしまう。

そして一時間ほど泣きわめいた後、翔は洞窟状になっている道を進む決意をした。

洞窟は自然にできた空洞の様でいくつにも道が枝分かれしており、翔はやけくそで左右の道を選びながら、進んで行った。

もう、三時間は歩いただろうか、もはや引き返せない状況に入口から動いた事はとんでもない過ちであったのではないかと後悔し始めた時、ふとももに鋭い痛みが走った。
「いってえ!!!!!!!!」

初めての戦い

ふとももにライトを当てるとコウモリが張り付いて血を吸っていた！

「いってぇな！このボケ！！！！」

慌てて手で振り払い、リュックから包丁を取り出す。

りんごを剥くために入れておいた物だが、持ってきて正解だった。

血の臭いを嗅ぎ付け、さらに数十匹が襲ってくる。

「うわあああああ！！！！！！！」

包丁を振り回し、必死に応戦する。

何匹かは払い落とせたが、どうしても全てを防ぎきれず、体を噛まれ、血を吸われてしまう。

コウモリの群れが退散した後には包丁に当たって死んだ数匹の死体と全身を噛まれ血だらけになった翔の姿があった。

最初の悲劇

噛まれた事による失血のダメージは想像以上だった。
頭はぼんやりとし、深い思考はできなくなり、ただふらふらと洞窟の中をさまよっている。
もう、何時間歩いたかも分からない。あるいは、何日も歩いたかもしれない。リュックの飲料と食料も底が尽きた。

「もう、だめかも・・・」
そう呟くと、遂に力尽きて、うつ伏せに倒れてしまった。
泥の水溜まりに顔を浸けてしまい、しこたま咳き込むと、口のなかに違和感を感じて、指でつまんでみる。
それは米粒ほどの小さな光る蒼い石だった。

「きれいだなぁ、俺もう死んじゃうかもだけど・・・」

暫く眺めていたが、何を思ったかその石を飲み込んでしまった。

そして、しばらくして、翔は泥に顔を埋めて死んだ・・・・・・

光明

「がはぁっ！！ゲホ！！ゴホ！！」
水溜まりに顔をつっこんでいた翔は突然、目が醒めた。

「あれ、俺死んだんじゃ？」

確かに生きている。
しかし、身体に変化があった。
まず、暗闇のはずなのによく辺りが見える。
空腹と喉の乾きがなくなった。
そして、驚くべき事にコウモリに噛まれた傷跡も綺麗に消えている。
服はズタズタに破れているのに！

不要になったライトを捨て、ヘルメットとずいぶん軽くなったリュックを装備し、再び洞窟を進んでいく。
片手は包丁を手放さない。
外で会ったら、通行人が卒倒しそうな格好だ。

「帰れるのかな、俺・・・」

不安と諦めが心のなかで入り交じっていた。

フランス人形

洞窟を探索している間、不思議とコウモリの襲撃はなくなっていた。
いなくなった訳ではなく、天井でじっと様子をうかがう感じだ。
洞窟の行き止まりに初めて遭遇した。
「ここはダメだな・・・」
引き返そうとした時に、岩陰から、何かが移動するのが視界に入った。
「！！！　誰かいるの？！」
ゆっくり近づいてみると、そこにはこちらを見ている９０センチ位のドレスを着たフランス人形がいた。
「！！！！！！！！！！！」
思わずゾッとし、恐る恐る話しかける。
「お前、生きてるの、か？」
人形はこちらをじっと見つめていたが、
「お前の名は？」
作り物の声だった。

一瞬気を失いかけた翔は

「我が名はク・！・・へ？し、翔だよ！」

頭を振って、言い直した。

無表情に翔を観察していた人形がまた機械の様な声を出した。

「転生は成功した様だな・・・」

「へ？どういう意味？」

「・・・・・」

「君の名前は？」

「ニャ・・・」

「ニヤ？」

「それでいい、お互い敵の多い身だ。ここで組むのも一つの手か」

例え人形であろうと気が狂いそうな孤独から解放されたのが翔にはたまらなく嬉しかった。

「うん、うん、よくわかんないけど、一緒に行こう！！」

翔はフランス人形と行動を共にする事になった。

仲間

フランス人形は本当に人形だった。
正確には歩く人形と言ってもいい。

人形だけあって職人が完璧さを求めた美しい顔立ちだが、当然無表情だ。

話しかけても回線が切れているのか、基本無視される。

常に翔の三メートル後ろでとことこついてくる。

こいつと仲間になった事に何か意味があったのだろうかと、向かっ腹が立つのをこらえ、洞窟の探索を続ける。

三日分くらい歩いただろうか、最近は何も食べなくても寝れば何故か体力が回復していた。

そして三日間ぶりに人形が喋った。

「敵だ」

戦闘

「はい？敵ってなんだ？コウモリか？」

怪訝な顔をして、翔がニヤに尋ねる。

「そんな甘っちょろいもんじゃない。」

ニヤが感情のない声で答える。

その甘っちょろいのに、一回殺されてるんですけど・・・

と、ぶつぶつ文句を言う翔。

そして、こちらに駆けてくる数人の足音が！

「くっそ！きたか！」

慌てて包丁を構える翔、人形は5メートル後ろで待機している。

走ってきたのは赤黒い鱗に覆われた一つ眼の怪物三体だった。人間と同じ大きさで槍を装備している。

「おい！お前も手伝えよ！こんなの俺だけじゃ無理じゃん！！！！！」

人形は後ろで完全に機能停止している。

「ふざけんなよ！おい！お前！！助けろって！！！！！」

三体は槍を構え同時に突っ込んできた！

振り回した包丁はかすりもせず、三本の槍が翔の胸と腹部を貫いた。

「がはあっ！！！」

人形がゆっくり口を開き、凄まじい火力の火焔を吐き出した！！！

瞬く間に翔もろとも三体の怪物は焼き尽くされた。

激昂

「目がさめたか。」

人形の声が聞こえる。

俺は死んだはず・・・こいつに焼かれて！！！

突然起き上がると包丁でニヤに切りつける！

しかし、少女は難なくそれをかわす。

「お前ふざけんな！！！！生きたまま焼かれるのがどんだけ苦しいかわかってんのか！！！！！！」

「ああしなければ共倒れだった。お前は貧弱だが、不死身だ。私は畏怖すべき力を持っているがかよわい。」

「自分でかよわいとかいうな！この人形野郎が！」

「どうやら我らの敵も組んだ様だ、今仲間割れをすれば、向こうの思う壺だ。」

「だから敵って何なんだよ！お前こそ俺の敵じゃねーのかよ！」

翔の怒りが収まらない。

いつの間にかニヤの顔が翔の目の前まできて、そしてキスしてきた！

「ん！！！な、なにをする！！！！」

慌ててニヤを引き離す。

人形とはいえ美しい少女にキスされ顔を真っ赤にする。

「親愛の証だ、人間はこうするのだろう？」

「ち、ちげーよ！馬鹿！お前！！」

「私の覚醒はまだ遠い、また暫く眠りに着くぞ」

「お、おい！待てよ！」

それ以来また人形は話さなくなった。

パンツ

翔は焼き尽くされた敵が残した鉄の槍を持っていく事にした。

包丁よりは幾分かは攻撃力も上がっただろう。

他に焼け残ったものはないか物色し、金属の胸あてを見つけて装備する。

「ニヤ！見てくれ！かっこいいだろ！」

後ろを向いたまま歩いていると、そのまま５０メートル位ある崖に落っこちていった。

また、翔は死んだ。

一眠りして完全に回復すると、まる一日かけて崖を這い上がった。

崖の上では、ニヤがしゃがんでこちらを見ている。

「あっ！ニヤのパンツ見えた！」

おどける翔に人形は無反応だった。

コンビニ

ニヤと行動を共にすること一週間、無口もだんだん気にならなくなってきた。

むしろ完璧とさえ言える美貌に見とれてしまい、谷底に落ちて死ぬ事もしばしば・・・

何より孤独から解放された嬉しさの方が強い。

ある日、洞窟は大きな広間に出た。

のはいいが、翔の口がポカンと開いた。

「なんでコンビニがあんなとこにあんねん・・・」

それは紛れもなく、日本にある「ファミ○」だった。

店内に入ってみると、ひとつ目の赤黒い鱗に覆われたばけものが、

「いらっしゃいませ！」

と愛想よく挨拶する。

言えねぇ、お前らの仲間三人焼き殺したなんて、口が裂けても言えねぇ・・・

ニヤが店員に「からあげ一つ」と言うと、

「お前食うんかい！！」

と、思わず突っ込んでしまう。

「２４０円です。」

「円かよ！すげーな円は！異世界でも使えんのか！！」

やけくそで突っ込む翔を無視して、ニヤがカエルのがま口サイフからお金を取りだし清算する。

「おい、店員！電話は繋がるのか？」

「はぁ、そこに」

店員が指差す先に公衆電話があった。

ニヤに１０円もらい、早速家にかけてみる。

・・・やっぱり繋がらなかった。

天敵

洞窟をさ迷って一ヶ月は経っただろうか。

翔、ニヤともに何も食べなくても生きられるのが不思議だったが、いや、そもそも二人は生きていると言えるのだろうか。

ひとつ目のコンビニ店員の仲間の襲撃が何度かあったが、翔の自己犠牲とニヤの超火焔攻撃でなんとか凌げた。

運よく鋼の鎧シリーズを着込んでいる奴がいたので、翔の装備もかなりよくなり、そう簡単には死ななくなってきた。

「なぁ、ニヤ、俺たちの敵って何なんだ？いいかげん、教えてくれよ」

ニヤはその日は回線が繋がっていた。

「お互いがこの宇宙が始まった時からの天敵だ。どちらかが完全に消滅するまで闘いは終わらない」

「つまり、お互い死ぬほど大嫌いってわけだな。」

「そういう事だ」

「俺はニヤの事嫌いじゃないぜ」

顔を赤くしながら、翔がつぶやく。

「わたしもだ、翔」

感情がこもっていないので、真意はわからない。

突然、頭のなかで声が聞こえた。

低く、地獄の底の様に暗い声だった。

「お前がク・・・・の生まれ変わりか・・・・」

忌むべき物

「ぐっ！頭がいってぇ！話かけるんじゃねー！」

「おぞましきもの、葬る、永遠に」

「うるせーってんだよ！！！」

「必ず、生滅させる、我が天敵よ・・・」

不気味な声が去っていった。

「何なんだ、今のは！！！」

「きたな、今、やつが」

ニヤが応える。人形なのに汗？が少し浮かんで見える。

「声だけで気が狂いそうだった。今の奴だけは絶対殺さなければいけない気になった。」

翔は全身に水を被った様に汗をかいている。

「それが天敵というものだ。戦いに理由などない。相手の存在が消えるまで終わらない。」

「とにかく奴をさっさと倒して終らせよう」

「そうだな・・・」

それきりニヤの回線が切れた。

漆黒の剣士

洞窟の旅は続く、まるで、洞窟自体が一つの世界である様に延々と果てがない。

ある日、ひとつ目の集団が何者かと戦闘しているのに遭遇した。

怪物は２０体くらいいたが、瞬く間に細切れになっていた。

「そこで隠れてる奴、出てこい」

怪物を倒した者が声を出した。

長髪で漆黒の鎧を着た、美しい剣士だった。

「へへ、ばれたか」

翔とニヤが岩影から姿を現す。

「子供？ここにきて人間に会ったのは始めてだ」

「お前の名は」

ニヤが男に問う。

「アネスだ。」

ニヤが少しの間沈黙して、相手を凝視する。

「やはりな、翔、この男は味方だ。」

「おぉ！そっか！あんためちゃ強いじゃん！！よろしく！」

「勝手に話を進めるな、まぁ断る理由もないが・・・・」

剣士が苦笑いしながら話す。

「断れるはずがない、お前は翔の・・」

その言葉を剣士が遮る。

「何の話だ？貴様、ニヤと言ったな、まさかニャ・・・」

その時、３０体位のひとつ目の集団がまた襲ってきた。

剣士はかすり傷ひとつ受けずに敵を倒していく。

翔は幾分かは喰らうが致命傷を受けず倒せる様になってきた。

今回はニヤの出番なく倒せそうだ。

全て倒した後、翔が握手を求める。

剣士は少し考えた後、手を差しのべた。

「よろしく！男前のにいちゃん！」

「あぁ、よろしく、我が・・・いや。」

男が途中で言葉を止める。

「その傷、大丈夫なのか？」

「こんくらい、寝たら治るぜ」

「それは、羨ましい、私は傷が深ければ死ぬだろう」

「あんた、アホみたいに強いから大丈夫だよ」

「アホ・・・」

少し顔がひきつる剣士。

「それでは行こうか、翔、アホ」

ニヤがなにげに暴言を吐く。

「調子に乗るなよ！二ャ・・・・・・！！！！！！！！！」

剣士が怒りの声をあげたが、翔には何故か名前の後半が聞こえないのであった。

使者

三人で旅をする様になって、一週間は経った。
剣士と人形の相性はすこぶる悪いみたいで、常に火花を散らしている。

仲裁に入る翔だが、それがアネスには気に入らないらしい。

ある日、アネスが翔を呼び出し、ニヤが見えなくなる所まで連れていくと、

「翔、私今まで隠していたけど・・・」

突然甲冑を脱ぎ始める。

黒いワンピース姿には、なんと豊かな胸が！！！

「本当は女だったの・・・」

「な！そうなの！？」

初対面ではどうみても男だったのに、そういえば声も女っぽくなっている。

翔が動揺していると、いつの間にかニヤがやってきて

「翔に気に入られたくて女になったな、アネス」

「なんの事かしら、最初から私は女よ」

アネスがしらばっくれる。

「あなたこそ、翔を油断させる為に、少女の格好をしているのかしら」

天井から低い笑い声が響き渡った。

三人は思わず身構える。

「貴様らが復活したと聞いて様子を見にきてみれば、女子供とは、これは御笑い草だ」

天井から降りてきたのは人ガタの闇だった。

「ナイト・・・・か」

ニヤが憎らしげに口を開く。

「気安く我が名を呼ぶな、汚ならしい腫れ女が！」

ナイトが怒りを顕にする。

「貴様ら成り損ない、ノ・・・・様の手を煩わせるまでもない、ここで全員死ね！！！」

ナイトの両手から大量の黒い煙が吐き出された。

ゾンビ

「煙に触れるな！躰が腐るぞ！」

アネスが黒い煙を避けながら叫ぶ。

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

忠告の甲斐なく翔が煙幕に飲み込まれる。

「翔！？ニヤ！何をしている！！地獄の火焔を速く撃て！！！」

充填中なのかニヤはピクリとも動かない。

「ははは、腐り果てて死ねい」

ナイトがさらに距離を詰めて煙を吐こうとした、その時、

何者かがナイトを羽交い締めにしていた。

それは、肉が焼けただれたゾンビであった。

「翔！！！」

「ニヤぁあああああ、撃てえぇえええ」

「ぐっ！離せこのしにぞこない！！」

ニヤの両目が赤光を放ち、口から火焔が吐き出される。

「ぐぎゃあああああ！！！！！」

直撃を喰らったナイトとゾンビの悲鳴が響き渡る。

「おのれ、二ャ・・・・・・この復讐は必ず・・・・」

地面に吸い込まれる様に、ナイトが退散していく。

「ノ・・・・に次はお前だと伝えておけ」

ニヤが影に向かって、そう言うと、

深い恨みの声とともに気配が消えた。

大好き

まる一日たって、翔が完全回復した。

嬉しさで思わず翔に抱きつくアネスとクールな眼差しのニヤが対称的だ。

「やはりハ・・・とノ・・・・・が組んだ様だな」

ニヤが珍しく口を開いた。

「我々が手を組んだ以上、当然の成り行きだ。」

アネスが翔に抱きつきながら答える。

（おっぱいが手に当たってるんですけど）

鼻血が出そうな翔がなんとか切り出す。

「なぁ、なんでお前らそんなに事情通なんだよ」

「翔が忘れ過ぎなのだ。強力な力と引き替えに記憶が吹き飛んだみたいね」

大好きといった眼差しでアネスが翔をみる。

ニヤが人の創造しうる完璧な美しさなら、アネスも自然が産み出した官能的で壮絶な美しさを持っている。

とは言え、アネスは最初は男だった様だが・・・

この二人にとっては性別等いつでも変更できるのかもしれない。

「アネス、翔にベタベタひっつくな。」

ニヤの発言はひょっとして嫉妬？

「あら、ニヤには関係のない事だわ」

ニヤも負けじと余った方の翔の腕をギュッと抱く。

少しではあるがこちらも柔らかい膨らみが・・・

翔にとっては奇跡のモテ期到来と言った所か。

そのまま三人は眠りについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5435x/

洞窟探検家

2011年10月29日04時20分発行